

長野県伊那市長谷・高遠区域における葬儀の変化

著者	喜馬 佳也乃, 山口 桃香, 李 詩慧, 鄭 紫来
雑誌名	地域研究年報
巻	41
ページ	177-187
発行年	2019-02
URL	http://hdl.handle.net/2241/00155254

長野県伊那市長谷・高遠区域における葬儀の変化

喜馬佳也乃・山口桃香・李 詩慧・鄭 紫来

本稿は、長野県伊那市長谷・高遠区域を事例に、社会変化に伴う葬祭方法の変遷について明らかにした。1970年代後半に土葬から火葬へと葬祭方法の転換が始まり、1980年後半までには火葬が一般化した。1990年以降になると、葬祭の場は自宅から公民館へと移転した。こうした葬祭の場が私的な場から公的な場へと変化したことで住民の葬儀に対する負担を軽減した。2000年代になると葬祭業者が参入するようになり、葬儀は地域の手を離れ、企業が提供する場が利用されるようになった。葬祭業者の参入によって地域で維持できなくなっていた葬儀は継続が可能となった。一方、墓地の立地にみられるような地縁のつながりは伝統的に重視されており、現在でも隣組組織の存在はなお住民にとって大きかった。高齢化が進展し若年層の流出も激しい山間地域にとって、こういった地縁は生活を支える上で重要な役割を果たしており、コミュニティで暮らすための基盤として重視されるべきものである。

キーワード：葬儀の変化、同族集団、山間地域、伊那市、旧長谷村

I はじめに

I-1 研究課題

歴史的に冠婚葬祭は地域共同体によって担われてきたが、近代以降その担い手は変化している。近代以降、都市部において葬儀は近代から地域共同体の手を離れ、東京での近代葬祭業者の業務が拡大し、葬儀慣習が変化していった(村上, 2011)。都市部を中心に地域や家族の関係性の希薄化や、葬儀の商品化が進展する中で、「散骨」や個人墓の増加など葬送も、あり方の自己決定が好まれるように変化してきた(森, 2010)。そうした都市部での変化に追従するように、地方での葬儀のあり方にも、特に高度経済成長期を経て火葬化や葬祭業者の参入が同じく進展している現状がある。

葬儀に関する研究としては宗教学や社会学、民俗学分野における数多くの研究が蓄積されている。地理学においては葬儀や墓に関する研究は、墓や火葬場の立地に関して行われてきた。中川(1997)は墓地の景観が反映する地域性を分析し、

また大城(1994)は、沖縄における墓地を題材に景観を読み解く際の場所の理解に対する課題を提示した。浅香(1994)は火葬場の機能や、火葬場を取り巻く環境や時代の要請によって変化していく火葬場の姿を明らかにした。また、村落の空間構成を明らかにするため、村落内組織や同族集団の場としての墓地割や葬儀を分析対象の一つとした岡島(1982)や服部(1983)などもある。こうした場所や景観の機能に着目した従来の研究に対し、藤岡(2018)はより産業的側面から喪家による葬儀の場所選択について調査をおこない、利用者のニーズに合わせた葬祭会館の選択が行われていることを明らかにした。これらの研究は時代ごとに変化し続けている葬送を取り巻く環境の特徴を地域的に読み解いてきたが、葬儀の変化を俯瞰し一地域の変化と連関して考察する視点は不足していると指摘できる。

以上をふまえ、本稿は、長野県伊那市長谷・高遠区域を対象に、土葬から火葬への転換や集落の高齢化、人口減少といった課題の中で、山間地域における葬儀がどのように変化してきたのかを明

らかにする。

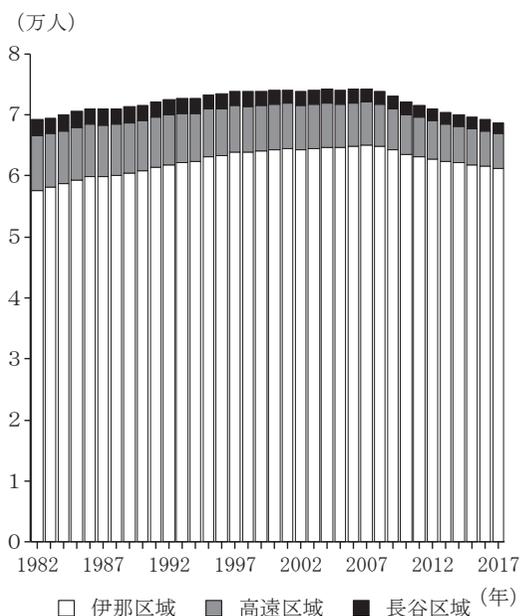
研究手順は以下の通りである。次節では研究対象地域の概要を述べる。IIでは、長谷・高遠区域における時代ごとの葬儀の方法について、長谷村史や既往研究、葬祭業者への聞き取り調査に基づいて述べる。IIIでは、現地住民への聞き取り調査に基づいて、集落ごとの葬儀と墓地の立地の特徴を記述し、長谷高遠区域における葬儀の変化の特徴を分析する。IVではこれまでに得られた知見を踏まえ、長谷・高遠区域の人口変化と地縁、血縁のあり方から山間地域における葬儀の変化とその課題を明らかにし、本研究全体をまとめることで結論とする。

なお、本稿では葬儀に関係するサービスを行う業者を「葬祭業者」と呼ぶ。また、通夜や告別式などの葬儀を行うための葬祭業者が運営する式場には「葬祭会館」の呼称を用いる。

I-2 研究対象地域

伊那市は長野県南部に位置し、東側には南アルプス、西側には中央アルプスが連なり、東西を日本アルプスに囲まれている。中心市街地には、一級河川である天竜川が南北に流れている。その天竜川に向かい、三峰川、大泉川、大清水川などが流れ込む。市の東部から南部にかけては、山梨県北杜市および南アルプス市、また静岡県静岡市と接している。伊那市の面積は667.93km²、2017年10月1日現在の人口は68,689人¹⁾である。現在の伊那市は、2006年3月31日に旧伊那市、高遠町、長谷村の合併により誕生した。当時の人口は74,092人であった(第1図)。合併後も伊那、高遠、長谷の名は残り、現在伊那市を3つに区分した区域の名称となっている。すなわち中心市街地を含む市の西部を伊那区域、北東部を高遠区域、南東部を長谷区域と呼んでいる。

本研究が対象地域としたのは長谷・高遠区域である(第2図)。長谷区域は、三峰川が形成した谷間に位置する典型的な山間の集落である。そのほか長谷区域には小黒川や山室川といった河川が流れ三峰川に注いでいる。また、三峰川の2か所

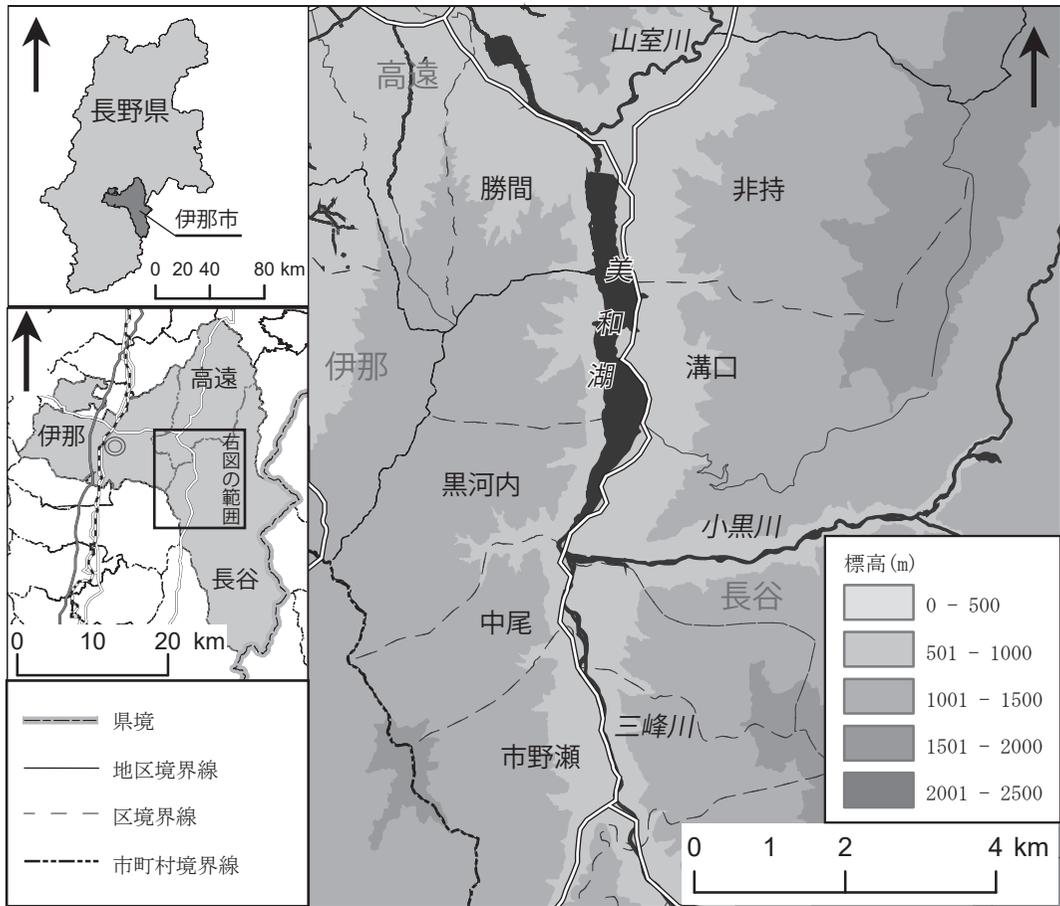


第1図 伊那市における区域別人口 (1982~2017年)

(住民基本台帳より作成)

にダムが建設されており、長谷区域にはそのうちより規模の大きい美和ダムが建設されている。ダムの上流部に広がる壮大なダム湖やその近くの「道の駅南アルプスむら長谷」は観光資源になっており、県外からの訪問者もみられる。長谷区域は、かつて7つの村から構成されていた。しかし1947年4月1日に市町村合併が行われ、非持村、溝口村、黒河内村の3村が合併し美和村に、また中尾村、市野瀬村、杉島村、浦村の4村が合併し伊那里村になった。その後、1959年4月1日に美和村と伊那里村が合併し長谷村が誕生した。長谷区域の面積は320.81km²と、伊那市全体のおよそ5割を占めている。一方、人口は2017年10月1日現在で1,769人と伊那市全体の1割にも満たない。集落別にみると、非持が656人と最も多く、溝口419人、市野瀬191人、非持山190人、黒河内141人、中尾87人、杉島73人、浦12人と続く。

長谷区域の集落の形態として、大きく4つ挙げることができる(長谷村誌刊行委員会、1994)。1つ目は河岸の沖積地に立地する集落である。河



第2図 研究対象地域

川や地下水など水資源が豊富なため、水田に最適の土地であり、日当たりもよく耕地に近いことで集落ができたが、水害が問題であった。堤防を建設する技術が発達してからは集落の範囲も広がり、交通の便もよかったため多くの集落が発展した。2つ目は河岸段丘上に立地する集落である。湧水が豊富であり、日当たりもよく、水田にも近いことから、古来より多くの集落が発展してきた。3つ目である河谷の集落は平地や斜面の下部などに立地している。こういった場所では水害のリスクが非常に高く、実際に被害を受けた集落も少なくない。また、日当たりはよくないものの、自給農業が営まれてきた。4つ目は、山腹の集落であり、緩やかな山腹の斜面に集落が立地している。その他の立地形態としては、台地や高原がみられ

るが、気温が他の形態より低いためあまり発展しなかった。

また、長谷区域の集落は臨済宗や曹洞宗といった禅宗を信仰するところが大多数であるが（大谷大学民俗学研究会編，1971）、非持の一部地域および非持山は日蓮宗である。日蓮宗である一部を除いた非持、溝口、黒河内は曹洞宗となっており、市野瀬には唯一臨済宗の寺院がある。

長谷区域を含め伊那市では古くから農林業が行われていた。特に林業は盛ん²⁾で、樽木と呼ばれる檜や杉などから切り出した上質な木材を年貢として納める村である「樽木成村」が現れるほどであった（三浦，1988）。また1960年頃までは、長谷区域は炭の産地でもあった（大谷大学民俗学研究会編，1971）。2018年現在も畑作、稲作、林業

が営まれており、林業従事者は一時半減したものの、その後は増加し2015年には2005年の3倍以上となり徐々に担い手が復活している。

次に高遠区域について概観する。高遠区域は高遠藩の城下町として栄えた地域である。高遠区域は、1875年に町制のもと西高遠町と東高遠町が成立し、1889年4月1日に両町が合併し高遠町となった。その後、1956年9月30日に長藤村と三義村とを合併した。1958年4月1日には藤沢村、そして1964年4月1日には河南村が合併した。2006年には、既述の通り伊那市の一部となり、現在は高遠区域となっている。高遠区域の面積は139.36km²で、2017年10月1日現在の人口は5,751人である。本研究で取り上げる勝間という集落は、高遠区域における河南地区に位置する。2017年10月1日現在の河南地区の人口は1,941人、そのうち勝間の人口は357人である。

このなかで本研究では、長谷区域の8集落のうち人口の少ない3集落を除いた、非持、溝口、市野瀬、非持山、黒河内の5集落、長谷区域に隣接している高遠区域の勝間集落を研究対象として設定する。

II 長谷・高遠区域における葬儀

長谷・高遠区域では、伝統的に土葬が行われてきたが、1956年の伊那里村での火葬場の設置に伴い1960年代頃から火葬へと転換が起こった。自宅で行われていた葬式も1990年代頃から公民館や寺院を利用するようになった。また、同時期に葬祭業者の参入もあり、2004年に高遠町に葬祭ホールが建設されたことで葬儀の場は葬祭ホールに移行した。本章では、長谷・高遠区域における時代ごとの葬儀の方法について長谷村史や既往研究、聞き取り調査に基づいて述べる。

II-1 土葬時代の葬儀

本節では、長谷・高遠区域における土葬時代の葬儀の方法について述べる。

土葬の時代において、人がなくなると、関係の

深い近親者がその体を拭き清めたあと、衣服を着替えさせ体の形を整える。この時魂は襟から出入りするという信仰から、着物は襟をとって左前に着せ、襟で帯をしめる。また、親類縁者に早急に連絡を行う必要があったため、各方面への担当者を決め、真夜中であろうと出立した。二人ずつ組になっていくが、必ず提灯を持っていった。連絡を行う先は親戚知人であるが、そのほかにも見舞いに来た相手には必ず知らせた。その内容は、死亡の時刻から埋葬場所まで詳細なものであった。受ける方は丁寧に受け、遠方からの告げの場合は一飯を振る舞うのが礼とされていた。

一方、その家に対して最も関係の近い人（本家・親様・分家など）や隣家の年配者が先に立って、葬儀の段取りをした。近所の女性たちは食材の買い出し、料理の準備やお茶の接待に当たる。葬送の手順について、まず暦を見てその六曜により日を見て、友引の日は、友を引くといって古来より葬式を避ける。兄弟や子供達が遠いところに居て、来るのに時間がかかる場合は、予め日を定めるので中一日あるいは二日置いた。そして、日取りの決定については、その時節も考慮に入れなければならなかった。殊に正月三ヶ日は葬式を出さない。また家業上、農家においては田植えの最中や、養蚕の最盛期には仮埋葬にすることが多かった。一旦日時が決まると、過去の香奠帳によって、その家族の付き合いや親類関係また死者のその家族に当たる位置（当主・主婦・年寄り・子ども）から見舞人の予想を立て、さらに葬式の規模、各人の分担役割によって葬送の手伝いの範囲や買物などを相談して決定していく。

人の死後における葬儀の仕方や習慣は地域や村落、宗派などによって様々である。長谷区域での葬儀の手順について以下に述べる。

誰が葬儀の役割の中心を担うのかは地域によって差異が存在する。葬儀のいろいろな仕事や役割は隣組の組員によって担う場合が多かった。葬儀用具の準備から出棺後の片付けまで隣組は重要な役割を果たしていた。葬儀の役割で特に重視されたもの、帳場と呼ばれる役割で、これは料理の出

来や盛り付けの出来を判断する役割であった。

葬儀の当日は早朝から隣組の人達が来て料理や支度を手伝った。土葬の穴掘りは激務であるが重要な仕事であるため、隣組ごとの穴掘帳によって決められた順番通りに、3人ずつで穴掘りすることになっていた。午前中から掘り始めるが、穴掘り中は重箱での弁当と酒が振る舞われ、葬儀当日も上座に座ることになるなど穴掘り役は丁重に扱われた。地区によって、親戚の者に掘らせるところもあった。

葬儀は家格、戒名、徴用、財政などによって一様ではないが、普通一仏と称した大和尚と2人の伴僧、計3人よって執りおこなわれた。特に豪勢な葬儀が執り行われる場合には三仏、つまり3名の大和尚と6名の伴僧が呼ばれることもあった。

葬儀は家で読経と焼香が行なわれたあと、寺か広場へ行った。送列は到着した寺や広場で三回半周り、導師の正面に棺を安置して引導が渡され、経があげられ、引導が渡された。その後、近親者の焼香がおこなわれて式が終わり、再び葬列を組んで墓所に到った（長谷村誌刊行委員会、1994）。埋葬にあたっては、棺の四隅に縄をつけ、墓穴に死者が北面するように吊った。喪主は棺の結び目を切って蓋の上に石をおき、近い血縁者から順に土をかぶせた。その後、盛土を作り、その上に穴掘りで使った木の棒を3本束ねて立て、中心から縄で石を吊った。

葬式が終わると、僧侶をもてなす。また、死者の着物や葬送に使ったものなどを洗い、近所から持ち寄ったもの、あるいは村落から借りた共用のものなどを返却した。葬送の片付も終わり一段落したあと、手伝い全員にお礼のあいさつをした。その後翌日か当日に、菩提寺に寺参りを行った。

II-2 火葬導入後の葬儀

長谷区域には1956年に長谷村の火葬場が市野瀬集落の南部に設置された。この長谷村火葬場は伊那市にも先駆けて設置されている。

この火葬場の設置の理由に関して、資料的根拠は得られていないが、住民への聞き取りでは、

1955年から1957年に建設された美和ダムの工事で事故死した作業員を火葬するためであるといった理由や、山で遭難した者の遺体を燃やすためであるといった理由が挙げられており、住民の遺体を火葬するためではなかったという認識があった。そのためか、葬送の火葬への転換は1960年を前後して始まる。大谷大学民俗学研究会編（1971）によると、1970年の段階で他の集落は土葬であるが市野瀬ではほとんど火葬を行っていると記載されていることから、近接地であった市野瀬から火葬が広がっていったと推測できる。市野瀬では火葬場の煙の臭いがすることもあったというが、火葬場が設置されたことへの当時の不満は聞き取りの中で語られることはなかったため、おおむね受け入れられていたようである。

火葬場の運営は村の職員が行っており、火葬場に遺体を運ぶ際も村が所有する自動車を使っていたという。

火葬は葬儀に先立って行われるため、葬儀の手順は特に変化しなかった。関沢（2015）で述べられている遺骨葬の形式であり、葬儀から埋葬まで土葬時の葬儀手順と変わらず行われた。

II-3 平成以降の葬儀体制の変化

地域共同体によって担われる葬儀は各家への負担も大きく、人的にも時間的にも多くの資源が必要とされた。しかし、高度経済成長期を経て、地域共同体の解体や、親族との関係性の弱まり、経済情勢の変化などにより、従来のような大規模な葬儀は負担が大きくなってきた。こうした中で、長谷・高遠区域では公民館や寺を利用した葬儀が1990年代から一斉に行われるようになった。公民館や寺といった大きな敷地を利用することで喪家に対する負担も減少し、また葬儀に利用する食器や座布団といった用具も集落で一揃え管理することで無駄を減らすことができた。

公民館や寺で葬儀を行うようになり、料理をどこで行うかといった問題が浮上した。この葬儀時の仕出し料理の提供の需要をくみ取ったのがJAの葬祭部門であった。

伊那地域においては、以前からJA伊那の葬祭部門が葬儀に必要な備品などの用立てを担っていたが、その葬祭部門が1992年に子会社として独立しA社として設立された。現在、伊那・駒ヶ根・伊北を拠点として当地の住民に葬儀のサービスを提供している。A社は2017年度の上伊那地域における葬儀件数の半数を担い、特に、長谷・高遠区域においては、葬儀件数の80～85%に達する。長谷・高遠区域での割合が高い背景として長谷・高遠区域に競合他社が少なかったことと、農業が盛んな地域であったため農協利用者が多かったことが考えられる。

A社の設立当初は自宅、寺、または集會場で、葬儀の準備、隣組の仕事を手伝っていたが、地域共同体の衰退に合わせてA社はサービスを拡充させてきた。葬儀の際料理を準備する人手が不足しているという状況から、1998年には仕出し料理を提供できるように、伊那・駒ヶ根・伊北を拠点化した。また、2004年には高遠に葬祭会館を建設した。

A社が設立した当初は、A社を利用する人は少なかった。しかし、農協の会員が利用し始めるのに伴い、A社の利用は集落でますます普及し、徐々に利用者が増えていった。当初は寺や集會場で葬儀を行うことが多かったが、葬祭業者が設置する葬祭会館へと移行していった。A社によると、長谷・高遠区域の住民の7割が葬祭会館で葬儀を行うことを選択している。また、1998年以降、死亡者数は微増しているが、上伊那における葬祭会館は0館から9館まで増加した。

長谷・高遠区域ではまだ昔ながらの伝統が残っており、150人規模の葬儀を行う習慣がある。特に料理の振る舞いは重要視されており、葬儀だけでなく新盆での大盤振る舞いなども行われている。A社のような葬祭業者が登場したことで、料理の負担を金銭的に解決できるようになったことで、生活改善運動によって一時質素化した振る舞い料理も、再び豪勢なものになっているという。

一方で、A社では近年の家族葬や直葬といった少人数で執り行うコンパクトな葬儀への需要も見

越し、小規模なホールを葬祭会館内に新設している。

高齢化や人口減少によって地域共同体での葬儀の維持が難しくなった今日において、葬祭業者の関与と葬祭会館の利用は、葬儀を滞りなく執り行うために不可欠なものとなっている。現在で葬祭業者の業務は葬儀全般にかかわっており、総合サービス業となっている。

Ⅲ 長谷・高遠区域における集落ごとの葬儀と墓地の特徴

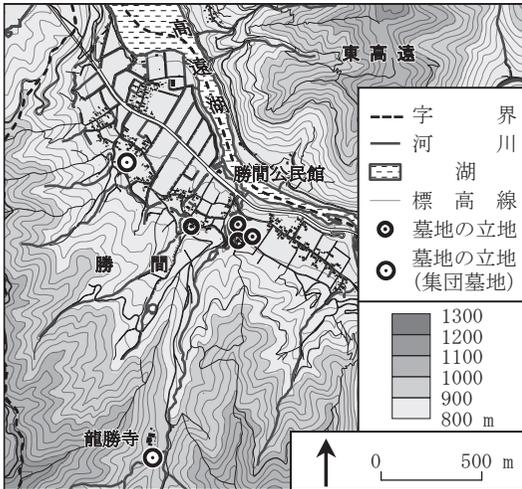
本章では、聞き取り調査や景観観察から得られた長谷区域の5集落、高遠区域の1集落の葬儀の変遷と墓地の特徴について述べる。聞き取り調査は、非持山、中非持・南非持、溝口では区長や区長経験者に、勝間、黒河内、市野瀬では住民に聞き取りを行った。

Ⅲ-1 事例集落の葬儀の変遷と墓地の特徴

1) 勝間

勝間は高遠区域の南部に位置する。火葬の導入は旧長谷村の集落よりも遅い1975年頃であった。また、旧高遠町には近代火葬場は設置されていなかったため、旧伊那市が長谷村の火葬場を利用していた。葬儀は自宅と寺で2回行っていたが、やがて自宅のみ変わって1990年代には公民館を利用するようになった。しかし公民館の利用は10年間ほどで終了し、代わって旧高遠町に完成した葬祭会館が使用されることがほとんどとなった。

勝間集落の墓は集落の住宅地から離れた高台に集積している（第3図）。図中の墓地の表記は、1から数基のみが集積している場所を墓地、それ以上に大規模に集積している場所や住民が集団で使っていると認識している場所を集団墓地とした。集団墓地の中でもジレイ³⁾ごとに集まって建立されている。ジレイの中にはジレイの祠をもつものも存在し、ジレイの関係性がなお残っている。



第3図 勝間集落における墓地の立地 (2018年)
(現地調査により作成)

2) 中非持・南非持

中非持・南非持の2集落は、美和ダムの東岸に位置する。曹洞宗の正随寺が南非持にあったが2018年段階では無住であるため、高遠区域の桂泉院の住職が非持区の檀家をもっている。中非持には祈禱寺である真言宗の観音寺も存在したが観音寺も無住である。

非持区では1965年ごろに火葬がはじまったが、1980年まで土葬が行われた事例もあった。葬儀は1990年代に自宅から公民館で行うようになった。他の集落と同じく、高遠区域の葬祭会館の完成後は同館を使うことがほとんどである。

南非持集落では生活改善運動にも積極的に取り組んでいる。生活改善運動は1920年代頃から全国の農村で展開された国民生活の合理化を目指した官製運動を指す。戦後は農林省が主導し導入したものであり、「農村民主化」を目指して農業協同組合の設置などが行なわれた。生活面においても農家の家庭環境の改善を目指し、衛生に関する知識の啓蒙や非合理であると判断された慣習の是正が図られた。

2018年現在でも、生活改善として伊那市では冠婚葬祭に関わる金額の少額化が勧められている。南非持では集落内の各年代から二十数名ほど集

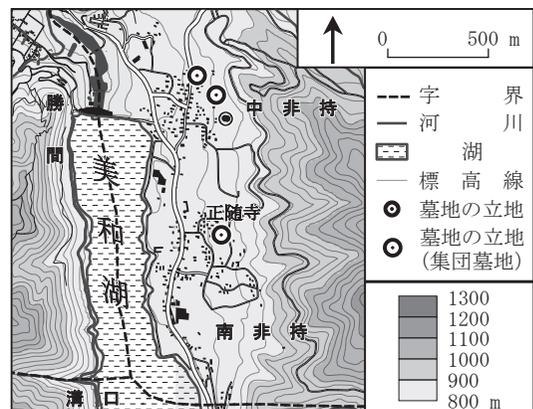
て集中的に会議を行い集落での方針を決定したという。特に香典の少額化と振る舞い料理の制限の取り組みは、2018年で3年目となっている。この南非持の取り組みは伊那市からも奨励を受けている。

墓地であるが、第4図のように中非持は観音寺脇と山裾に三か所、南非持は正随寺脇にそれぞれ集積して立地している。

3) 非持山

非持山は人口186人、72世帯の集落で、住民のほとんどが集落内に立地する日蓮宗の玄立寺を菩提寺とする。池上姓が多い集落で、高遠城下で活躍した日蓮宗本身延山久遠寺大工の棟梁・池上清左衛門をはじめとする池上氏の位牌を祀った「池上氏の位牌堂」は、伊那市文化財に指定されている。この「池上氏の位牌堂」では毎年8月に非持山の池上姓の住民が先祖を祀る例祭を開いている。10軒以上の規模を有する池上姓の大きなジリイもあり、ジリイごとのまとまりは現在でも比較的強く残っている。「池上氏の位牌堂」は玄立寺の裏手の墓地の隣に立地している。

葬儀としては元々、自宅から寺へ移動し本葬を執り行い、その後墓地に移動し土葬するというプロセスが非持山でも用いられていた。葬送・葬儀の変化として、1961年には火葬が行われている。



第4図 中非持・南非持集落における墓地の立地 (2018年)

(現地調査により作成)

一方で1990年代に入ってから土葬が行われたこともあった。

1962年に分教場の跡地に非持山公民館が建設された。建設当時、集落では意欲的に公民館の役割が考えられ、主に結婚式を想定した冠婚葬祭を行えるよう2部屋と調理場を供えた施設となった。しかしながら結婚式に用いられることはなかったが、1996年には役場の職員であった故人の葬儀が自宅の代わりに公民館で行われた。こうした変化は何らかの出来事が引き起こしたというより、「外」の風潮に合わせて自然と変化したという。葬儀はジレイが中心的役割を担っている。A社の有する高遠区域の葬儀場が建設されてからは、そのホールで葬儀を行うことがほとんどである。

墓地は玄立寺の裏手にあたる南方に設置されている(第5図)。永代貸し出しを行っており、集落のほとんどの住民がこの墓地を利用している。墓地はジレイごとに墓を集め、区画も方形に整理されている。現在ではほとんどが骨壺を収めることが出来る石碑に改築されているが、例外的に規模の大きいジレイは大きな石碑を建立し墓の集約を行っている(写真1)。

4) 溝口

溝口は人口449人、125世帯を有する集落で、長谷区域の中心地域である。曹洞宗の常福寺があり、集落のほとんどの世帯はこの寺院を菩提寺にしている。

溝口では1968年に最後の土葬が行われ、1970年

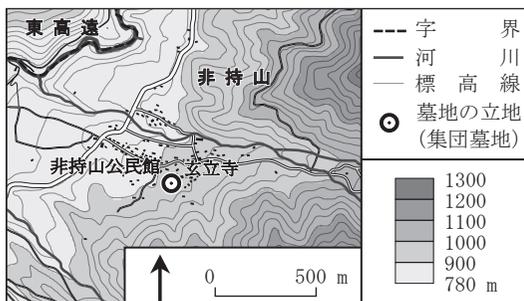


写真1 非持山のジレイの集約的な墓

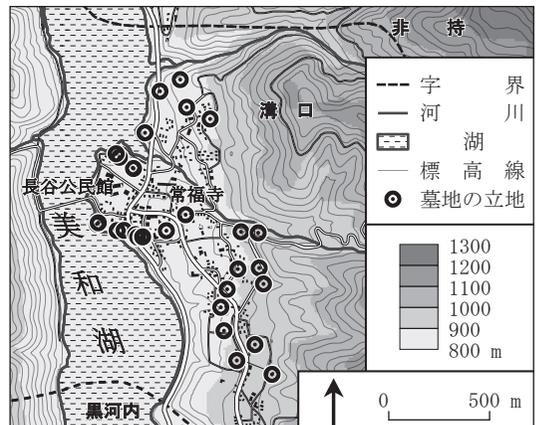
(2018年5月 喜馬撮影)

代から火葬が浸透するようになった。溝口では葬儀を常福寺でおこなうように区で心掛けており、現在でも葬祭会館を会場に使わず、葬祭業者にはソフト面でのみ依頼を行うことが多いという。これは集落の人口が減り、寺の経営が厳しくなり無住化していく中、寺を維持するための取り組みである。

墓は家・ジレイごとに所有する土地、主に田畑の脇や山裾に造営されている(第6図)。大半の墓は住宅地から一定の距離を取って集落の外縁に位置しているが、一部住宅に近接した墓もある。美和ダムの建設や浄化センターなどの建設によって墓地を移転させた例もある。



第5図 非持山集落における墓地の立地(2018年)
(現地調査により作成)



第6図 溝口集落における墓地の立地(2018年)
(現地調査により作成)

5) 黒河内・和泉原

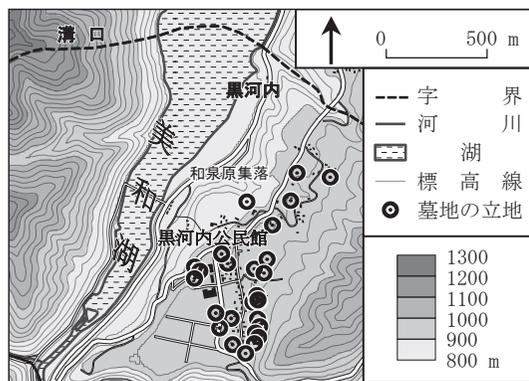
黒河内は三峰川の右岸の河岸段丘の台地上に立地する、人口136人、53世帯の集落である。和泉原は黒河内の西部に当たる字名である。黒河内の菩提寺は曹洞宗の大揚寺である。現在は無住であり、溝口区の常福寺の住職が兼務している。

住民への聞き取りによると1955年ごろにはすでに火葬が行われていたそうであるが、火葬を行いつつも1980年代まで土葬も継続していたという。黒河内でも1990年代に公民館での葬儀が行われるようになったが、A社による葬祭会館が建設されて以降はその葬儀場か、現在の檀那寺に当たる常福寺での葬儀が多い。

墓地は、集落の外縁に当たる山裾や田畑の脇に設置されている（第7図）。ほとんどが高台にあり、家屋からの距離も一定以上離れている。よって、集落を囲うように立地している。

6) 市野瀬

三峰川左岸に位置する市野瀬は、秋葉街道の宿場町であり、旧伊那里村の中心地域であった。市野瀬の寺院は臨済宗の圓通寺である。住職は長野県飯田市の出身で、1985年ごろに圓通寺の住職となったが、さらにそれ以前は10年ほど無住であった。それ以前は山梨県からきた住職が2世代にわたって就業していた。圓通寺は集落の中心から西南の山沿いに立地し、集落よりも高台にある。



第7図 黒河内・和泉原集落における墓地の立地 (2018年)

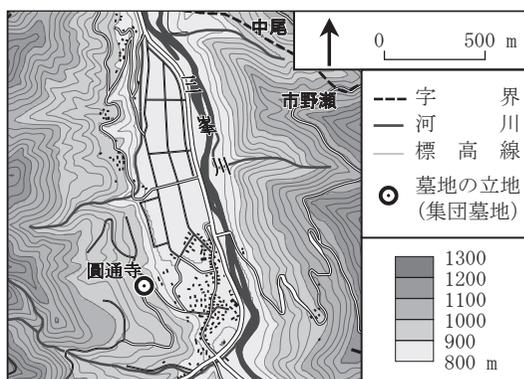
(現地調査により作成)

現在の住職が来訪した1980年代後半から90年代初頭まで、葬儀は自宅と寺を使用し2か所で読経していたが、90年代に寺での葬儀に一本化するようになった。葬儀の際、寺の庭で炊き出しを行ったり、料理を持ち寄ったりしていた。また、住職の知る限り集落内に料理屋が4軒ほどあった時期もあったため、仕出しを頼むこともできたという。しかし、A社が仕出し事業を始めてからはA社に頼むことがほとんどになった。そして、高遠区域に葬祭会館ができてからは、その利用が大半になってきている。

墓地は第8図のように圓通寺の塀の外に隣接して斜面にへばりつくように設置されており、集落のほとんどの世帯がこの墓地に墓を建てている。墓地の位置は土葬時代から変わらっておらず、ジルイごとに集積している。住民の知る伝承によれば、もともとは個人所有の土地に墓も存在したが、水害によって流されてしまったことから高台付近に移転させたという。墓地は永代供養で墓を作る時に寺に料金を払うことになっている。

Ⅲ-2 長谷・高遠区域での墓地の特徴

以上から、長谷・高遠区域における墓地の立地についてまとめると、ジルイや家ごとに個人の土地に墓地をつくる散開型と、寺院の側や山際の土地に集積する集積型の2類型に分けられる。どちらの類型においても高台に立地しており、非持山



第8図 市野瀬集落における墓地の立地 (2018年)

(現地調査により作成)

や市野瀬での伝承からも水害を避けるためであることが読み取れる。散開型である溝口や黒河内の和泉原集落は河岸段丘上に位置しており、集落全体が水害に見舞われにくいいため、住宅地を囲うように散開した形状が可能であったと考えられる。

一方、市野瀬のような河谷の集落は、土地も限られ河川との距離も近いため、山裾に墓地を集積させる必要があったと考えられる。

またジレイといった氏族組織も重要視されており、特に非持山はジレイ組織の活動が顕著である。この構造は墓地の集積にも反映されているとみられる。

Ⅲ-3 長谷・高遠区域での葬儀の変遷

葬儀に関連する各集落の推移をまとめると第9図のようになる。1956年に旧長谷村の火葬場が建設されるが、住民には1965年ごろから火葬が導入されていく経緯が明らかとなった。大谷大学民俗学研究会編（1971）の調査を踏まえると、最も火葬場に近かった市野瀬から浸透していったとみられる。その後1980年代には完全に火葬に切り替わった様子が伺える。

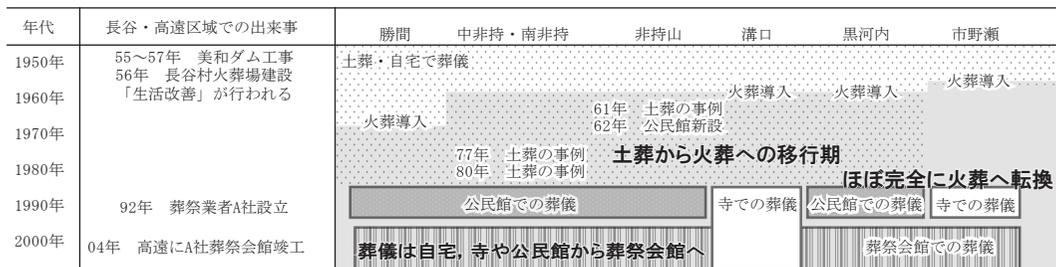
現在の60歳代から80歳代の世代は、土葬と火葬どちらの葬送も経験しているが、その親・祖父母世代は火葬に対して「燃やされるのが怖い」「熱いのはいやだ」といた心情があったことが語られている。一方、現在の住民の火葬に対する意識としては、「土葬より楽」「さっぱりとする」といったような意見が語られていた。また「(火葬の方が楽だから)生活改善運動の一つとして火葬への

転換があったのでは」といった考えを持つ住民もいた。生活改善運動自体は儀礼の簡素化・経費削減をめざすものであるため、直接的因果関係は認められないものの、生活改善への意識が築いた「合理化」や「改善意識」といった志向が、火葬への転換に関わる心理的障壁を取り払ったという評価もし得るだろう。

長谷・高遠区域では高齢化や離村者の増加、自宅の小型化を理由に、1990年代に自宅での葬儀から公民館、あるいは寺院での葬儀にほとんど一斉に切り替わった。非持山での例のように結婚式場としての公民館建設は、生活改善運動の結婚改善を意識したものであったが、公民館での結婚式自体は結果として少なかった。しかしながら、このことによって公民館や集会所が冠婚葬祭のための場として利用される契機となったと考えられる。

IV 結論

本稿では、社会変化に伴う長谷・高遠区域の葬祭方法の変遷について明らかにした。従来は土葬が中心であったが、1970年代後半に火葬が始まり徐々に浸透し、1980年後半までには火葬が一般化した。火葬に転換したことで労力は軽減したが、葬送自体は地縁や血縁をもとにした自宅葬であった。1990年以降、自宅から公民館へ、葬儀の場が移転した。これによって各家庭で準備していた葬儀に必要な道具も集落で管理することができ、また自宅での葬儀という負担も軽減された。こうした転換の背景には生活改善運動への意識があった



第9図 長谷・高遠区域での葬儀の変遷

(聞き取り調査・現地調査により作成)

ことが推測された。

また、2000年代になり葬祭業者の参入と葬祭会館の建設によって、長谷・高遠区域での葬義は葬祭業者に委託されるようになり、地域の手を離れることとなった。だが墓地の立地にみられるような地縁のつながりは伝統的に重視されており、現在でも隣組組織の存在はなお住民にとって大きいことも明らかとなった。高齢化が進展し若年層の流出も激しい山間地域にとって、こういった地縁は生活を支えるものであり、コミュニティで暮らすための基盤として重視されるべきものである。

葬祭業者の参入によって地域で維持できなくなっていた葬儀は継続が可能となったが、地域共

同体関係性の希薄化を進展させてもいる。一方で、地域内での負担として生活改善運動の対象となった料理の大盤振る舞いのような伝統的な側面も、葬祭業者の登場で復活するといった動きも見られた。

長谷・高遠区域のような高齢化した山間部の集落において、地域共同体の地縁を維持されていたからこそ、2000年代に入るまで地域共同体による葬儀が維持されてきた。地縁が希薄化する現状において、従来の儀礼の維持は難しいものとなっているが、葬祭業者による負担の軽減によって、高齢化した住民にとって馴染みのある葬祭儀礼が維持されていく方策も求められる。

本稿を作成するにあたり、元長谷公民館館長様、圓通寺住職様、遠照寺住職様、株式会社グレース様、そして非持区長様、非持山区長様並びに非持山区祭事委員長様・祭事委員様をはじめ各区の住民の皆様にご多大なるご協力を賜りました。以上、末筆になりますが厚くお礼申し上げます。

[注]

- 1) 以下、集落の人口は平成29年10月1日の住民基本台帳を参照している。
- 2) この卓越していた林業は村の経済を支えていた。市野瀬集落での聞き取りによると、経済成長期の頃は山を売って、子の東京への大学進学、上京費用を賄っていたという。こうして首都圏へ進出した子世代には、バスや鉄道による関東圏へのアクセスの良さを生かし、平日は東京で働き、休日には地元に戻ることで兼業農家をおこなっていたという者もいた。
- 3) ジルイ(チルイ)とは同族集団のことを指す言葉である。本家と分家の関係性があり、祖先崇拜と相互扶助的性格をもつ集団である。

[参考文献]

- 浅香勝輔(1994):環境変化と都市型火葬場。歴史地理学, 167, 42-64.
- 大城直樹(1994):墓地と場所感覚。地理学評論, 67A, 169-182.
- 大谷大学民俗学研究会(1971):『長谷村の民俗 総合民族調査報告書(第三号)』大谷大学民俗学研究会.
- 岡島正幸(1982):同族集団「マケ」からみた村落の空間構成－長野県小布施町山王島の場合－。新地理, 30, 30-40.
- 関沢まゆみ(2015):火葬化とその意味 「遺骸葬」と「遺骨葬」:納骨施設の必須化。国立歴史民俗博物館研究報告, 191, 91-136.
- 中川 正(1997):『ルイジアナの墓地－死の景観地理学』古今書院.
- 服部 誠(1983):山村における親類結合の変貌－鈴鹿山脈北部時山集落の場合－。新地理, 31, 15-25.
- 長谷村誌刊行委員会(1994):『長谷村誌 第二巻 自然編 現代社会編』長谷村誌刊行委員会.
- 藤岡英之(2018):喪家による葬儀の場所選択の変容－1990年代以降における「下野新聞」お悔やみ欄の分析から－。人文地理, 70, 49-71.
- 三浦 宏(1988):『伊那谷山村の変貌－その歴史地理学的研究－』信濃教育会出版部.
- 村上興匡(2001):近代葬祭業の成立と葬儀慣習の変遷。国立歴史民俗博物館研究報告, 91, 137-148.
- 森 謙二(2010):葬式の個人化のゆくえ－日本型家族の解体と葬送－。家族社会学研究, 22(1), 30-42.

